

城郭の研究——文學博士大類伸著

大正四年十一月發行 (紙數三〇九頁)

本書は、日本學術普及會發行の『歴史講座』の一編として出版されたものであつて、著者が多年の間城郭に就いて遂行した研究の要點を簡易平明に叙述したものである。専門の學者にも、また一般の讀者にも頗る興味のあるものと思ふ。

本文は、一、序説、二、市邑と山城(朝鮮及支那の城郭)、三、本邦人の城郭觀念、四、寺院と城郭、五、天守閣、六、江戸時代の城下、七、江戸城、八、京阪及東北の城郭(築城術の比較)、九、城郭の美觀、十、幕末の江戸灣防禦計畫、十一、城の文化史的研究の十一章より成り、別に附録として本邦城郭保存の議と題する一章を添てある。著者の特に重きを措く所は、其の所謂文化史的研究、即ち一の時代の社會現象、若しくは文明的産物に於て等しく發現する或る性質(時代精神)が、如何に城郭の上に現はれて居るかといふ點であつて、著者は、城郭を單に城郭としてののみ研究せず、各時代の城郭を其の時

代によつて説明し、また城郭によつて其の時代を知らんと務められたやうである。併し本書に記述する所は、實はそれだけに止まらない。

著者は、日本の城郭のみならず、支那・朝鮮・及西洋の城郭のことも述べて、多少城郭の比較的、研究をも試みられた。城郭は著者の云はるゝ如く、主として軍事上の目的で築造され、防禦地、また策源地として其の價値を有するものである。この軍事的方面の研究は、著者、別の著書で之を試みられたこのことで、本書には軍事以外の方面に關する研究を載せることにしたこのことであるけれども、本書中の記述は、自然、軍事に關したことに及んで居る。城郭其のものゝ研究は、評者の意見では、廣義の考古學に屬し、それ自からに於て亦研究の價値があるものと思ふが、著者は實際それをも試みて居る。一の築造物としての城郭の變遷沿革の研究は、廣義の建築史に屬し、それには有用技術の歴史の方面と美術史の方面とがあることであるが、此の兩方面の建築史的研究も或る

程度まで本書に於て之を見ることが出来る。其の城郭の所在に就きて地理的關係を尋ね、又本邦城郭の地方的差別を論せられた所などは、歴史地理及地方史の研究に關係を有して居る。著者は『封建大名の城郭には政治的の意味も含んで居る、又社會的經濟的關係も少くない』とし、城郭の社會經濟史上の意義にも説き及ばれ、城郭の築造と都市の發生との關係、城下町及街道のことなども記述された。

第六章『江戸時代の城下』の中に於て、築城の際『街道を城郭に近く導いて、城下を通過させるのが通例であつた』とし、『試みに山陽道の地圖を開き、中國街道に沿うて仔細に觀察して行けば、舊城下に至る毎に街道が屈曲して居るのを見るであらう、殊に姫路の如きは著しく街道の曲折した一例である、是は蓋し舊時の街道は城よりも遙か北方を通じて居たが、築城の際之を城の南に導いた結果であつた』と説いて居る(一六三—一六四頁)。是れは交通地理の研究者に興味のある事であらう

第九章、『城郭の美觀』に於ては、多くの城郭は殆んどすべて白壁を用ひ、白壁は城の特色であるとし、之に對し神社佛閣には多く赤色を用ひたりと説き、『封建時代は白と赤と黒(商店の土藏の色)との三色の組合せである、予は封建時代と云へば直ちに、白と赤と黒との三色を思ひ出さずに居られない、此等の色別けは現代のやうな種々の色を配合して、變化に富んだ間色を自由勝手に用ふる風に比すれば、實に不自由な封建時代の世相を示すものである、然し其の不自由な間に封建時代の重厚なドッシリとした空氣が満ちて居つた』と論せられた、(二四三頁)面白い説き方である。

著者の所謂『城の文化史的研究』の思想は、第十章(二七四頁以下)に記する所に據つて、略ぼ察知せられる。氏が人間生活に於ける普遍性と特殊性との両面を認めて、史學の研究に入りたい(二七七頁)と云はれたのは、予輩の甚だ悦ぶ所であるが、氏が専ら一時代の現象に通有なるものを普遍性と考へられたのは、少しくいかゞである。一

時代の現象に通用なる性質(時代精神)は、其の時代に於ては普遍的であり、其の時代の一々の現象の有する特殊性に對しては、之を普遍性と稱することが出來やうけれども、之を一層廣い見地から見るときには、其の所謂普遍性の多くは、實は其の特別なる時代の特徴ともいふべきものである。國民歴史を一貫して考へる場合、また一步進んで各國の歴史を比較して研究する場合には、其の所謂普遍性の多くは、實は一の特別の時代の特殊性である。予輩は著者が人間の生活には、それよりも更に一層普遍的なる要素のあることを認められんことを希望する。而して予輩はまた著者に向つて、新しき意義に於ける史學研究は、果して單に所謂『文化史的研究』のみに止まる乎を更に考慮せられんことを望まざるを得ない。

(内田 銀藏)

Ludwig Burgstrasser : Die diplomatischen Kämpfe vor Kriegsansbruch.

(戰爭勃發前の外交折衝)

これは、ヒストリーリツシエ・ツアイトシユリフトの第百十四卷に掲載されて居る論文で、單行本として公にされたものではない。然しながら雜誌論文とは云ふものゝ、通計百四頁に亘る長篇であつて、且つ分量に於てのみならず、其出來榮わかから評しても、立派な著書と同等に見做して差支なきものである。全篇は五章に分かれたれ、(一)關係史料、(二)セラエヲ兇行より塞耳維の回答迄、(三)塞耳維に對する澳國の宣戰迄、(四)獨佛兩國の動員迄、(五)英國の態度決定、といふ順序になつて居るが、其中で最も多くの頁數を費して居るのは第二章である。これはセラエヲ兇行が戰爭の發端であるといふので、之を詳論したからであるが、敵味方を論せず辯護の仕様のないのは兇行事件であるから、それに附け込んで澳國の態度を辯護し、同時に其同盟たる獨逸の辯護をして居る所は巧妙な論じ方ではあるが、公平を缺くものたるは争はれ難い。著者は自ら題して『戰爭參加諸國の公表文書を基礎とせる批評的研究』と云つて居るけれ